実力向上講座（仮名）

【第十八回】「仮名の基礎・基本とその書き方」

―⑱四行書きの練習その4―

巣鴨中学校・高等学校教諭
本誌編集委員
熊坂　尚史

■前回のまとめ

前回は連綿のアレンジとして「傾斜法」のお話をしてから関戸本古今集をベースに四行書きを作ってみました。まとめると次のようになります。

・連綿の方法に傾斜法がある。
・傾斜法は隠し味程度に。
・関戸本の変体仮名を楽しむ。

今回は本阿弥切古今和歌集を使って四行書きを作ってみますが、その前に、清少納言が書いた枕草子二十一段に『古今集』のくだりが出てきますので紹介しておきましょう。

■古今和歌集は平安貴族必須の教養

「村上の御時に、宣耀殿の女御と聞こえけるは小一条の左の大臣殿の御娘におはしけると、誰かは知りたてまつりざらむ。また姫君と聞こえけるとき、父おとどの教えきこえたまいけることは、『一には、御手を習ひたまえ。次には、琴の御琴を、人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては、古今の歌二十巻をみな浮かべさせ給ふを、御学問にはせさせ給へ』となむ、聞こえ給ひけると…」

（二十一段　清涼殿の丑寅の隅の）

「昔、村上天皇の御代に宣耀殿の女御と申しあげた方は、小一条の左大臣殿の御娘でおいでになったと、だれが存じ上げない人があろう。また姫君と申し上げた時、父の大殿がお教え申し上げなさったことは、『第一にお習字をなさい。次に七弦の琴を人より上手に弾こうと思いなさい。そうしてその次には、古今集の歌二十巻を全部を空にお思い浮かべされることを御学問にあそばされませ』と申し上げなさったのだったと…」

※新編日本古典文学全集「枕草子」小学館より引用

なんとお姫様は「古今和歌集全二十巻一一〇〇首を丸暗記しなさい！」と言われていたんですね……。

また十二世紀半ばにまとめられたとされる有職故実書『類聚雑要抄』に高貴な女性の調度に図1のように万葉集抄や後撰和歌集抄とともに古今和歌集抄上下二帖が収められていたこと

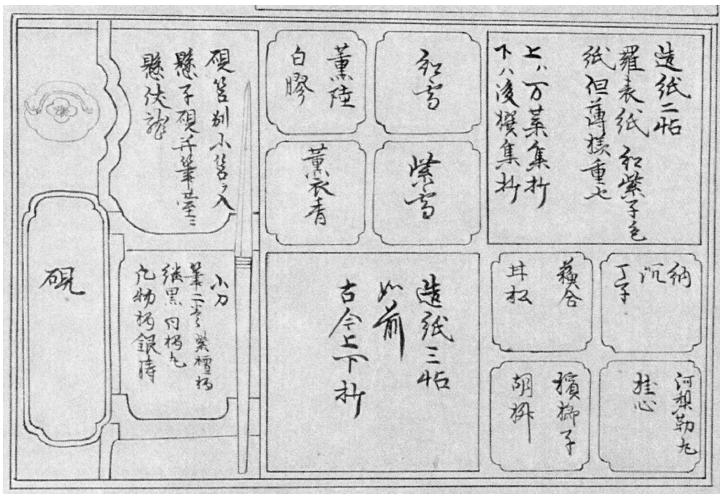


図１　『類聚雑要抄』（国会図書館デジタルコレクションより引用）

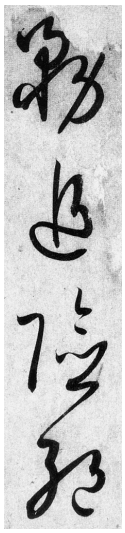


図２　既能険絶

図３　復帰平正

が記されています。

さて、この連載で選んだ基本古筆の中では本阿弥切古今和歌集はいちばん灰汁が強い古筆かと思いますが、中国唐代の孫過程の『書譜』にも「既に平正（整然として正しいこと）を知れば、務めて険絶（非常に険しいこと）を追ふ。既に険絶を能くすれば、また平正に帰す。」とあります（図２、図３）。

初心のうちは謙虚に整然としたものを習い、少し慣れてきたときには個性的なものにも挑戦して、最後にはまた整然として正しいものに戻るのが良いということですから、今回は勇気を持って本阿弥切にチャレンジしてみましょう！

■本阿弥切について

伝称筆者は小野道風ですが、使われている料紙などから十二世紀前半の書と考えられています。

寛永の三筆の一人、本阿弥光悦（一五五八～一六六五）が愛蔵していたと伝えられることから本阿弥切と呼ばれています。古今和歌集の巻十二の一巻が京都国立博物館に、巻十六の三首欠けたものに巻十七の六首をつなげたものを継いだ一巻（ともに零巻）が御物として残る他に多くの断簡が伝わっています。

舶載の唐紙に、白・藍・茶の具引きをして夾竹桃や唐草模様を雲母で摺りだした縦約十七cm、横二十八cmという小型の料紙に書かれています。

高校の教科書ではⅡかⅢで仮名の多様性や料紙の教材としてよく取り上げられています。

また能書で知られる江戸時代前期から中期にかけての公家である近衛家熙の精密な臨書が、二玄社の日本名跡叢刊の巻末に掲載されていますのでぜひご覧になってみてください。

■撰歌

今回の題材は、前回同様に後撰和歌集にしようか、それとも万葉集にしてみようか……などと迷いましたが、ここまで季節の歌ばかりでしたので思い切って古今和歌集の巻第十四「恋歌四」より読み人知らずの歌を選んでみました。

いつはりの　なき世なりせば　いかばかり
人の言の葉　うれしからまし

（口語訳）嘘偽りのない世だったならば、どれほど人の言葉がうれしく思われることだろうに。

※対訳古典シリーズ『古今和歌集』小町谷照彦訳注、旺文社、より引用

なお、巻十四は日本名跡叢刊『本阿彌切古今集』の解説に益田家旧蔵とありますが、現在は所在不明のようで、大阪の藤田美術館所蔵の

「あひみずば…」の断簡一首のみ掲載されています。

関戸本古今集の一首「いつはりの…」とともに参考までに載せました（図4、図5）。

■集字・配字

例によって二玄社の日本名筆選をめくって字を探していきました。なるべく京都国立博物館蔵の十五ページまでのところで集めて統一感を出そうと思ったのですが、いろいろ調整するうちに何文字かは後半から拾うことになってしまいました。

「幾」や「意」など本阿弥切の特徴を出しやすい文字をなるべく選んだつもりですが（図6、図7）上手くいきましたかどうか……。

今回も試行錯誤しながらなんとか切り貼りをして、出来上がったのが図8です。

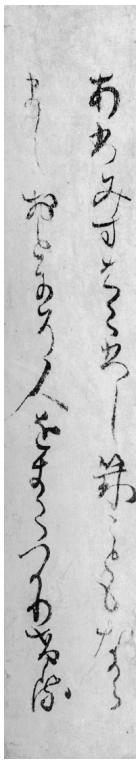


図4 本阿弥切

図5 関戸本

図6「幾」

図7「意」

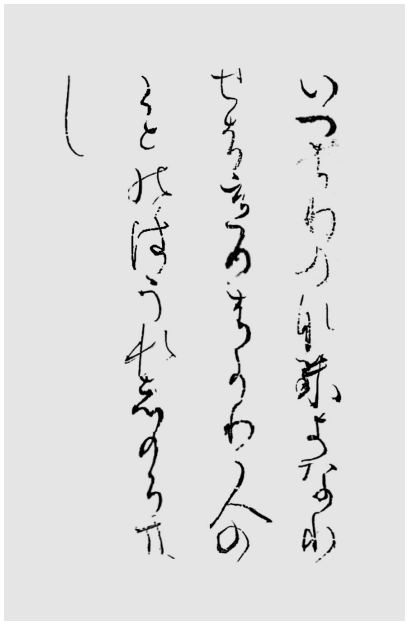


図8 配字

■解説

配字の切り貼り作業のなかで、なかなか表現しにくいのが連綿線です。今回は二行目の「意可者可利（いかばかり）」を五字連綿にして縦の流れを強調してみました。また、その中で二つの「可」の形を変えています。

配字では「利」が三文字ありましたが、変化を出すために一つを平仮名の「り」に変更しました。

書き出しは放ち書き（意連）で静かにスタートし、「那幾」で盛り上がるようにしています。

二行目の「可者可（かはか）」は字幅は狭いのですが字間を詰めていることと、「者」の後半で側筆を使って粘りを出しています。

三行目の下部は「れ」と「志」を接近させ組み合わせるように書いています。本阿弥切では行末にこのような処理をした箇所が多く見られます。

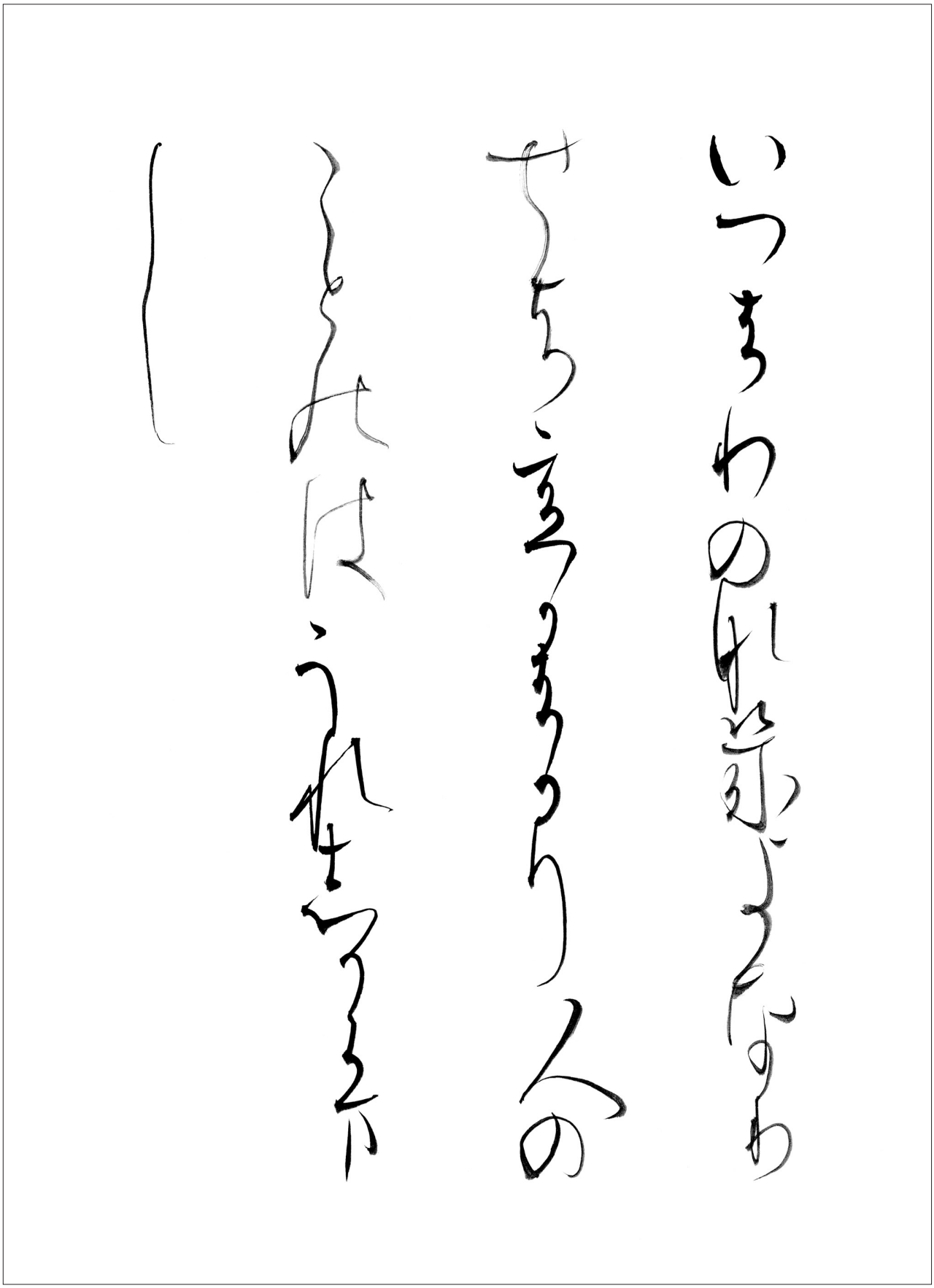
四行目の「し」は単調さを避けるために少しだけゆらしてみました。

全体的に本阿弥切の特徴であるコロコロとした回転運動がしっかりと感じられたら成功かと思います。

■今回のまとめ

・古今和歌集は平安貴族の必須の教養だった（万葉集・後撰和歌集も）。
・本阿弥切の由来と特徴を知る。
・連綿の仕方を工夫して変化を出す。

次回は基本古筆のラスト、寸松庵色紙（すんしょうあんしきし）を鑑賞しながら、「散らし書き」の解説をしようと思います。



いつ者利の　那幾よな利せ者　意可者可り　人のこと能は　うれ志可ら万し